1 大昔は湖だった！　化石の宝庫可児

歴史じまん

ヒラマキウマのアゴの化石（複製）

アネクテンスゾウの頭骨の化石（複製）

すごい point

・可児では、貴重な化石がたくさん見つかっているよ。
・大昔、可児には大きな湖があって、動物たちが生活しやすい環境だったんだよ。

◎貴重な化石

可児地域には多くの植物・動物化石がふくまれる地層が広がっていて、貴重な化石がたくさん見つかっています。とくに、ゾウ、サイ、ウマ、シカのなかまといった大型ほ乳動物化石がたくさん見つかっており、発見された動物化石の数は、日本一といってもよいくらいです。

見つかった動物化石は、「ヒラマキウマ」や「カニサイ」のように、発見された土地の名前が付けられました。ヒラマキウマやカニサイは、今から約1800万年から1900万年前に生きていた動物で、今のウマやサイとはちがう、すでに絶滅している動物です。

◎化石株ってなに？

ヒラマキウマが可児にいたころ、この地域には大きな湖があり、周辺に植物がおいしげっていて動物が生活しやすい環境だったと考えられています。

緑ケ丘の団地をつくるときには、たくさんの植物化石が見つかりました。現在でも、平貝戸地内の可児川では、大きな木の株が、立った状態で化石になったもの（化石株）を見ることができます。これはメタセコイアという、今は日本に自生していない木の化石です。

平貝戸の化石株

◎足あとの化石も発見！

平成21年6月、下切地区の河川改修工事のさい、動物の足あとと思われる化石が大量に見つかりました。足あとの化石は、約300㎡の範囲に大小650個ほどが確認されました。この足あとは、いろいろな動物が水辺に集まっていたことを示すものです。

動物の足あとと思われる化石
（下切地区）

2 可児のあけぼの　旧石器時代の人たち

歴史じまん

すごいpoint

・可児でも約２万年前に人がいたことが、石器からわかったよ。

◎人類が誕生し、広がるまで

地球上に人類が登場したのは、今から約650万年前です。初期の人類は、大型霊長類と共通の祖先から分かれ、ヒトへと進化してきました。

以前は、猿人→原人→旧人→新人の四つの段階を経て、現在のヒトにいたったとされていました。

しかし、近年では猿人から新人へ一直線の系図は引けず、複雑な進化をたどったと考えられており、旧人と新人の区分もあいまいです。

現在の研究では、アフリカで出現した人類が約７万年前に世界へ広がっていったとされています。

◎約2万年前の石器

可児へ人が来たのは、約２万年前のことです。建物のあとなどは見つかっていませんが、当時の人々が使用した石の道具（石器）が、下恵土や川合で見つかっています。

旧石器時代の人たちには、鉄などで道具を作る技術がなかったため、石や木などを加工して道具を作っていました。

見つかった石器は、石材を割ったり欠いたりしながら、ナイフのように加工したものです。

川合地区で見つかった石器

◎旧石器時代の人々の生活は？

２万年前に可児にいた人々は、食べ物となるものを探して、移動しながら生活していたのかもしれません。お米や麦といった作物はつくることをせず、木の実を拾ったり、魚をとったり、ときには動物を狩って食べていたと考えられています。

◎道具から見られる交流のあかし

可児では、黒曜石というガラスのような材質の石が見つかっています。黒曜石は可児ではとれない石で、長野県などの山にあります。このことから、旧石器時代の可児の人々がいくつかの地域との交流を通じて、長野県の石材を手に入れていたことが分かります。

黒曜石

3 日本最大級の銅鐸　県重要文化財 久々利銅鐸

歴史じまん

すごい point

- 高さが111.5cm、重さが24.45kg もある大きな銅鐸だよ。
- 今から約1800年前につくられたんだ。

久々利銅鐸

江戸時代の享保18年（1733）に、久々利の丘陵地で銅鐸が出土しました。この銅鐸は、出土地の地名をとって、「久々利銅鐸」とよばれています。

現在の高さは111.5cm、重さは24.45kgで、今までに日本全国でみつかった銅鐸のなかでも特に大きなものです。一部が欠けていますが、表面を見ると細かな文様が表現されています。

久々利銅鐸は、今から約1800年前の弥生時代につくられたと考えられています。さびて緑色をしていますが、つくられた当時は、神秘的な金銅色のかがやきを放っていました。

弥生時代の可児には、このようなりっぱな銅鐸を持つことができる豊かなムラがあったのかもしれません。

◎銅鐸は何に使われていた？

銅鐸が何に使われていたのかという「なぞ」については、さまざまな説があります。

「作物がたくさんとれるように」「雨が降りますように」「災害が起こらないように」など、当時の人々の思いをこめたおまつりや儀式の道具だったという説。

また、悪いものの進入を防ぐために、ムラの境界の山などにうめたという説もありますが、はっきりとは分かっていません。

銅鐸づくりの想像図
（公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター提供）

◎「聞く銅鐸」と「見る銅鐸」

初期の銅鐸は小さなもので、楽器のように鳴らす道具として使われていました。銅鐸の内側に「舌」という棒のようなものがぶら下がっていて、ベルのように鳴らしたと考えられています。これは「聞く銅鐸」とよばれるものです。

その後、しだいに大きな銅鐸がつくられるようになり、鳴らすための「舌」がなくなってしまいます。これは「見る銅鐸」とよばれるものです。久々利銅鐸は、日本最大級の「見る銅鐸」であり、岐阜県の重要文化財に指定されています。

4 景行天皇のおきさきは可児出身　泳宮の伝説

歴史じまん

泳宮公園（久々利地区）

八坂入彦命の墓（久々利地区）

すごい point

・日本書紀という約1300年前の書物には、「ククリ」という場所での物語が書いてあるよ。

奈良時代に書かれた『日本書紀』という書物の中には、美濃国（現在の岐阜県美濃地方）の「ククリ」にまつわる物語が書かれています。『日本書紀』には、天皇が「ククリ」を訪れてしばらく滞在し、その間にきさきをみつけたことが記されているのです。

◎泳宮の伝説

ククリを訪問したのは景行天皇。冒険伝説で有名な、ヤマトタケルの父にあたる人物です。美濃国の「ククリ」を訪れた景行天皇は、弟媛という美女の存在を耳にします。弟媛は八坂入彦命の娘であり、八坂入媛という姉がいました。

天皇は弟媛との結婚を望みますが、弟媛は竹林にかくれてしまいました。そこで天皇は、仮の住まいである「くくりのみや」（泳宮）に滞在し、池に鯉を泳がせて弟媛が来るのを待っていました。弟媛は鯉を見ようと、こっそり泳宮にやってきたところ、天皇に見つかってしまいます。天皇は弟媛にプロポーズをしますが、弟媛は天皇にとつぐことを断り、姉の八坂入媛を自分の代わりにきさきにすることをすすめ、天皇はそれを受け入れました。その後、天皇と八坂入媛との間には、七人の男の子と六人の女の子が生まれました。

『日本書紀』が書かれた西暦720年ごろ（今から約1300年前）には、奈良の都にこの物語が伝わっていたことは間違いありません。

また、「ククリ」という地名は、歴史じまん❼に登場する木簡や、日本最古の和歌集である『万葉集』の中にも登場します。「ククリ」は、当時の都の人にとっても、よく知られた地名であったようです。この「ククリ」は、現在の可児市の「久々利」だと考えられています。天皇が滞在した「泳宮」のあととされる場所が、伝説の場所として久々利地内に残されています。

5 東美濃地方最大の前方後円墳　国史跡　長塚古墳

歴史じまん

長塚古墳（中恵土地区）

長塚古墳、野中古墳、西寺山古墳の３つを合わせて「前波の三ツ塚」とよんでいるよ。

すごい point

・東美濃地方で一番大きな前方後円墳だよ。
・大きな力を持っていた人物が、可児にいたんだね。

◎古墳ってなに？

古墳とは、古墳時代につくられたお墓です。今から約1750年前～約1300年前までの間に多くの古墳がつくられました。その時代を古墳時代とよんでいます。

古墳は、おもに土と石を積み重ねてつくられています。前方後円墳をはじめ、前方後方墳、円墳、方墳、横穴墓などの種類があります。

◎東美濃地方で一番大きな古墳

可児市では、古墳時代の間に約400基もの古墳がつくられたと考えられていますが、その中でも一番大きなものが中恵土にある前方後円墳の長塚古墳です。

長塚古墳は、可児市だけでなく東美濃地方全体でも一番大きな古墳で、全長約72m、高さが７mもあります。

◎長塚古墳は、だれのお墓？

では、この大きな古墳はいったいだれのお墓なのでしょうか？

このような大きさの古墳をつくるには、多くの人々の労力が必要です。

長塚古墳からは、銅鏡やガラス製の管玉、石製の腕輪などが見つかっています。これは大きな力を持つ人物しか所持できなかったものです。

古墳の大きさや見つかった品物から考えて、長塚古墳は、可児をふくむ東美濃一帯を支配していたリーダーのお墓と考えられます。

長塚古墳から出土した銅鏡や管玉等

6 東海地方最大級の方墳
県史跡　川合次郎兵衛塚１号墳

歴史じまん

川合次郎兵衛塚１号墳（川合地区）

空中写真（発掘調査時）

すごい point

・東海地方で最大級の方墳だよ。
・石室が３つもあるめずらしい古墳だよ。

川合公民館の東側には、大きな石積みの古墳があります。

川合次郎兵衛塚１号墳は、７世紀の初めごろ（今から約1400年前）につくられました。歴史じまん❺の長塚古墳より200年以上も後につくられた古墳です。この古墳は、上から見た形が四角いので、方墳といいます。一辺の長さは約30m で、方墳の中では、東海地方でも最大級の大きさです。

◎たくさんのふき石

川合次郎兵衛塚１号墳の特徴は、一番上の部分以外が川原石でおおわれていることです。このように積まれた石を「ふき石」と言います。全体で約２万個の石が使われています。

◎3つの石室

この古墳には、横穴式の石室が３つもあります。石室とは、亡くなった人を納める場所です。普通は、横穴式石室が１つですが、ある時期に２つの石室を増やしています。追加でつくられた石室は親族用で、東側の小さな石室は、こども用だと考えられています。

◎巨大な石

川合次郎兵衛塚１号墳の石室には、とても大きな石が使われています。天井やかべには、川合ではとれない石も使われています。ダンプカーやクレーンのない時代、人の力で運んできて積み上げられました。長塚古墳と同じように、この古墳をつくった人は、多くの人に指示する力をもち、今の可児市よりずっと広い可児地域全体を治めていたことが想像できます。

7 どうして「カニ」って名前がついたの？

歴史じまん

すごいpoint

・「カニ」という地名は、約1300年以上も前からあるんだよ。
・なぜ「カニ」というのか、さまざまな説があるんだね。

「カニ」という地名はとてもめずらしく、全国でも同じような地名はほとんどありません。

西暦677年、美濃国（現在の岐阜県美濃地方）から現在の奈良県明日香村に運ばれた荷物に付けられた木簡（木の札）には、「加尓」と書かれていました。これが、現在みつかっている「カニ」の地名のもっとも古い記録です。その木簡には、「久々利」という地名も書かれています。

今から1300年以上も前に、「カニ」や「久々利」という地名があったのですね。

では、「カニ」という地名はどうしてついたのでしょうか？

いくつかの説を紹介します。

木簡がみつかった飛鳥池遺跡
（奈良県明日香村）

奈良県飛鳥池遺跡出土の木簡
（複製）

◎お寺の名前から？

御嵩町の願興寺（通称可児薬師）のお薬師様が「蟹」の背中に乗ってきたことから、「カニ」と呼ぶようになったとの伝説があります。

しかし、お寺ができた時よりも木簡に書かれた年代のほうが古いため、疑問が残る説です。

◎川の名前から？

可児川の名前から、「カニ」と呼ぶようになったという説もあります。

昔は、モノが曲がっていることを「カネ」と呼んでいました。可児川は、ぐねぐねと曲がっているので「カネガワ」といい、それがなまって「カニガワ」というようになったのではないかとも考えられます。

可児市を流れる
木曽川と可児川

◎豪族の名前から？

むかし、このあたりに「和珥氏（ワニシ）」という豪族がいたとの説があります。「ワニ」の「和」は「カ」と読むこともあり、「ワニ」の読みが「カニ」へと変化したのではないかというものです。

以上の説はすべて推測です。結局、「カニ」の地名がとても古くからあるため、どうして「カニ」という地名がついたかについては結論が出ません。

8 1000年も前から人々を見守る薬王寺の仏さま

歴史じまん

薬王寺本堂（帷子地区）

薬王寺の仏像

すごいpoint

・約1000年前の平安時代につくられた仏像があるよ。
・仏像やお寺を、地域の人たちが力を合わせて守ってきたんだね。

◎薬王寺とは

薬王寺は、東帷子にある天台宗という宗派のお寺です。

薬王寺のお堂には、仏像などのたくさんの文化財があります。薬王寺のお堂は、江戸時代に建てられたもので、現在可児市内に残っている建物の中でも特に古いものの一つです。

薬王寺でいちばん大きな仏像は、高さが2.7mもある本尊の薬師如来坐像です。この薬師如来は、病気治療の仏さまとして信仰されており、今から約1000年前の平安時代につくられました。その胴体部分には、一本の大きな木が丸ごと使われています。

薬王寺には薬師如来以外に６体の仏像があるほか、のき先に彫られている２匹の竜は、生きているかのように動いたという伝説のある彫刻です。薬師如来をふくめたこれらの仏像と彫刻は、建物とともに文化財に指定されています。

◎薬王寺の自然

薬王寺の境内北側のため池では、絶滅危惧種に指定されている「ヒメコウホネ」や、千葉県の遺跡から発見されたハスの種からよみがえった「大賀ハス」が６～８月ごろにきれいな花をさかせます。

ヒメコウホネ

大賀ハス

9 承久の乱　大井戸渡の古戦場跡

歴史じまん

大井戸渡の古戦場跡（広角撮影：左が可児市）

すごいpoint

・可児市でおこった最も大きな戦いだよ。
・鎌倉時代、日本の歴史を変えた戦いが可児市（土田）で始まったんだよ。

◎大井戸の戦いとは

昔、可児市を通っていた大きな道路「東山道」は、現在の土田の渡地区付近で木曽川を渡っていたと考えられています。その頃の土田周辺は「大井戸」という地名で知られていました。鎌倉時代に起こったとても大きな戦いである「承久の乱」（1221年）は、京都から進んできた朝廷軍と、鎌倉を出発した幕府軍が、ここ大井戸で最初に交戦しました。

鎌倉を出発し、東山道を進んできた幕府軍は、木曽川の左岸（可児市側）に布陣しました。一方、これを阻もうとする朝廷軍は、木曽川の右岸（美濃加茂市側）でこれを迎えうちました。幕府軍は、10倍以上といわれる兵力をもって木曽川を渡り、朝廷軍を敗走させました。

この「承久の乱」は、最終的に北条義時を中心とした幕府軍が勝利しました。鎌倉幕府はこの戦いを契機に全国支配を確実なものとしていったとされています。

可児の地で始まった戦いが、その後の日本の歴史に大きな影響を与えていったのです。

10 明智光秀のルーツ　明智荘

明智荘（広角撮影：明智城跡より）

すごいpoint

・平安時代から記録にあらわれるとても古い荘園なんだ！
・明智光秀の一族のルーツは明智荘である可能性が高いよ。

◎平安時代から栄えた荘園

荘園とは、貴族や寺社が所有している土地のことをいいます。明智荘（明知荘）は、現在の可児市北東部から、御嵩町西部にかけて存在した荘園の名前です。明智荘は承暦２年（1078）の記録に登場しますので、今から約1000年前にはすでにあったことが分かります。これは、確認されているなかでは可児市内で最も古い荘園となります。

明智荘は、はじめは藤原氏が所有し、その後、石清水八幡宮（京都府）の所有となりました。鎌倉時代の後期になると、各地で力を蓄えてきた武士たちが荘園を実質的に支配するようになっていきますが、明智荘も地元の武士たちが実質的な所有権を握っていったものと思われます。

明智光秀公像（明智城跡）

◎明智光秀のルーツ

はっきりとした記録は残っていませんが、西暦1340年代から「土岐」という名字の一族が明智荘に住み、明智と名乗るようになったようです。

これが「土岐明智氏」と呼ばれる一族であり、後に戦国武将・明智光秀を輩出することになります。諸説あるものの、明智光秀のルーツは先祖が住んだ可児の明智荘であった可能性が高いでしょう。

11 美濃桃山陶の聖地

すごいpoint

・可児ですばらしい焼きものがつくられたんだよ。
・久々利の大萱は、国宝の志野茶わん「卯花墻」が生み出された場所なんだ。

美濃桃山陶の聖地（荒川豊蔵資料館）

◎織田信長とかかわりがあった！？

天正元年（1573）、織田信長の許可を受けて、加藤景豊という人物が久々利の大平で陶器を焼く窯を造りました。その後、景豊の子の景成が久々利大萱で陶器を焼き始めました。

この時期に、可児をふくむ東美濃で焼かれた陶器を「美濃桃山陶」といいます。美濃桃山陶が焼かれた期間は短く、可児で焼かれていたことは、いつしか忘れさられていきました。

◎焼きものの歴史が変わる大発見

昭和５年（1930）、荒川豊蔵が久々利大萱で志野の破片を発見しました。それまで、志野などの桃山陶は愛知県瀬戸市で焼かれていたと考えられていましたが、この発見により、可児で焼かれていたことが、はじめて明らかになりました。

これは、日本の焼きものの歴史が変わる大発見でした。

荒川豊蔵が発見した志野の破片

◎桃山文化の流行を生み出した地

久々利の大萱や大平には、安土桃山時代から江戸時代のはじめにかけてつくられた窯跡がいくつもあり、志野などの美濃桃山陶が焼かれていました。

なかでも、牟田洞窯では、約400年前に現在「卯花墻」と名が付く国宝の志野茶わんが焼かれたといわれています。

志野の破片を発見した荒川豊蔵は、この場所で作陶をはじめ、昭和30年（1955）に人間国宝に認定されました。約400年前に国宝の茶わんがつくられ、人間国宝の荒川豊蔵が作陶を行った特別な場所なので、久々利の大萱は「美濃桃山陶の聖地」と呼ばれています。

国宝の志野茶わん「卯花墻」
（三井記念美術館所蔵）

豊蔵が住んでいた家

美濃桃山陶の聖地・久々利大萱には、荒川豊蔵の作品や集めたものを展示する荒川豊蔵資料館があります。また、豊蔵が住んでいた家や、陶器を作った作業場などを見学することもできます。

また、荒川豊蔵資料館の敷地内には、美濃桃山陶が焼かれた窯跡（牟田洞古窯）も残っています。

12 美濃桃山陶ってなに？

すごいpoint

・可児でつくられた美濃桃山陶が「茶の湯文化」を支えたんだ。
・志野は、日本ではじめて「絵」を描きこんだ焼きものだったんだ。

室町時代以降、茶の湯が武士や商人などを中心に流行しました。それまで、良い茶器は中国や朝鮮でつくられたものが主流でしたが、千利休や古田織部という茶人が国産の陶器の価値を高めていきました。

可児をふくむ東美濃では今までに無かった新しい色や形の焼きものがつくられ、多くの茶人に愛されました。

これらの焼きものを美濃桃山陶といいます。

瀬戸黒

黄瀬戸

美濃桃山陶の種類

◎瀬戸黒 … 焼いている途中で窯の中から引き出し、急に冷やすことで黒くした焼きものです。茶を飲む器として使われます。

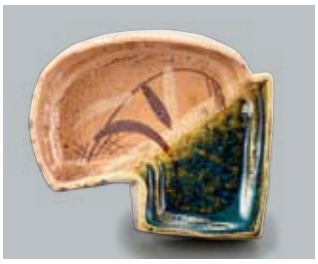
◎黄瀬戸 … 淡い黄色の焼きものです。草や花を線で刻んで描き、一部に茶色や緑色の色をつけるものもあります。

志野

鼠志野

◎志野 …… 筆で下絵を描き、その上に白い薬をかけて焼いたものです。筆で陶器に下絵を描くことは、日本では志野からはじまりました。

弥七田織部


鳴海織部

◎織部 …… 土岐市で焼かれはじめたといわれます。たくさんの色が使われた、ユニークなデザインの焼きものです。可児市では、「弥七田織部」と名がつく、美しい織部が焼かれました。

赤織部

黒織部

13 たくさんあるよ！　戦国時代の城跡

歴史じまん

すごいpoint

・可児市には、10か所の戦国時代の城跡があるよ。
・それぞれのお城に役割や特徴があったんだね。

可児市山城連絡協議会提供

全国には、山城のあとが３～４万か所あるといわれており、可児市には伝承もふくめて10か所もの城跡があります。

◎城が築かれた理由

可児にたくさんの城跡があったのは…

❶人やものの移動に便利な木曽川や飛騨川があること
❷りっぱな道である中山道が通っていたこと
❸美濃国（岐阜県）と尾張国（愛知県）の国境に位置すること

など、交通上や地理上の理由が考えられます。

可児に築かれたお城の多くは、徳川家康と豊臣秀吉という、後の天下人が争った小牧・長久手の戦いにおいて、重要な役割を果たしました。その後、徳川家康によって江戸幕府が開かれ、平和な時代が訪れると、その役割を終えました。

美濃国をおさめた守護大名土岐氏一族の城

土岐氏一族のお城としては、久々利城、明智城、羽崎城がありました。特に久々利城は大きなお城でした。このお城の出入口はとても複雑で、一度に多くの人が攻められないように、入りこんだ人を迷わせるようにつくられています。その他にも人が簡単に登れないような急な斜面が特徴です。

久々利城復元イラスト
（株式会社パロマ提供）

久々利城跡

村を守るための城

大森城や今城、室原城などはもともと、村を守るための小さなお城でした。その後、大きな戦いのためにつくりかえられました。塩河城、吹ヶ洞砦は戦いのために新しくつくったお城なのかもしれません。

大森城復元イラスト

今城復元イラスト

重要な場所に築かれた城

土田城跡からのながめ

美濃金山城下町復元イラスト

美濃国と尾張国の境にあたる土田地区には土田城が築かれました。

美濃金山城は、織田信長や豊臣秀吉の家臣である森氏が城主となって、高い石垣や住むための建物が作られ、東美濃全体を支配するための中心になった城です。

14 国史跡　美濃金山城跡

すごいpoint

・織田信長や豊臣秀吉の家臣として活躍した森氏一族のお城だよ。
・石垣などのお城のしかけが、昔のまま残っているよ。

美濃金山城復元イラスト

本丸跡の様子

◎美濃金山城とは

美濃金山城は、織田信長や豊臣秀吉が生きた時代のお城です。「山城」と呼ばれる種類のお城で、防ぎょの上で有利となるように、地形を上手に利用しています。美濃金山城跡では、高い石垣や建物のあとがわかる柱の土台石をみることができます。また、お城を使わなくなったときにこわしたあとも見ることができます。

このお城は、美濃国が信濃国（長野県）から攻められないための、大事なお城でした。

◎美濃金山城のなりたち

美濃金山城は、天文６年（1537）に斎藤正義という人物によって築かれ、烏峰城と名付けられました。斎藤正義は久々利城の土岐悪五郎によって殺されてしまいます。

その後、尾張国（愛知県）にいた織田信長が永禄８年（1565）に烏峰城を手に入れ、家臣の森可成を城主とし、お城の名前を金山城と改めました。

米蔵跡の石垣

◎森氏一族の城

森可成が亡くなった後は、息子の長可、乱丸、忠政が城主となりました。森氏一族は、約40年間金山（兼山）を治めました。慶長５年（1600）の森氏の転封にともない、城はこわされましたが、その資材一式は犬山に運ばれ、再利用されたという伝承があります。これは「金山越」と呼ばれています。

15 木曽川とのかかわり

すごいpoint

- 木曽川に橋がなかった時代は、木曽川を船で渡っていたんだよ。
- 昔から、可児の人々のくらしは木曽川と密接にかかわっていたんだね。

江戸時代の太田の渡し（手前側が可児と思われる）
（中山道広重美術館所蔵）

木曽川は、可児市の北側を流れている大きな川です。長野県の鉢盛山を水源として、けわしい流れとなって谷を下り、岐阜県・愛知県・三重県を通って、伊勢湾へと注いでいます。

◎木曽川を渡る

可児には、江戸時代の重要な道路の一つである中山道が通っていました。中山道は江戸と京都をつなぐ道でしたが、可児付近で木曽川を渡る必要がありました。

太田橋ができる前は、人々は船に乗って木曽川を渡っていました。船の発着場のことを「渡し場」といい、可児では今渡に渡し場がありました。この渡し場は、現在の美濃加茂市の太田まで渡るので「太田の渡し」と呼ばれ、木曽川が増水すると渡れなくなるので、中山道の難所となっていました。

昭和２年(1927)、今渡の渡し場の近くに太田橋がかけられ、いつでも安全に渡ることができるようになりました。

太田橋開通式（昭和２年）
（今渡　田口宏家資料）

現在の太田橋

◎観光地として

可児付近の木曽川の風景は、ドイツのライン川流域の風景と似ていることから、大正時代には「日本ライン」と呼ばれるようになりました。

昭和６年（1931）には、可児から犬山市（愛知県）までの流域・約12㎞の区間が国の「名勝」に指定されました。「名勝」とは、特にすぐれた風景がある場所のことです。

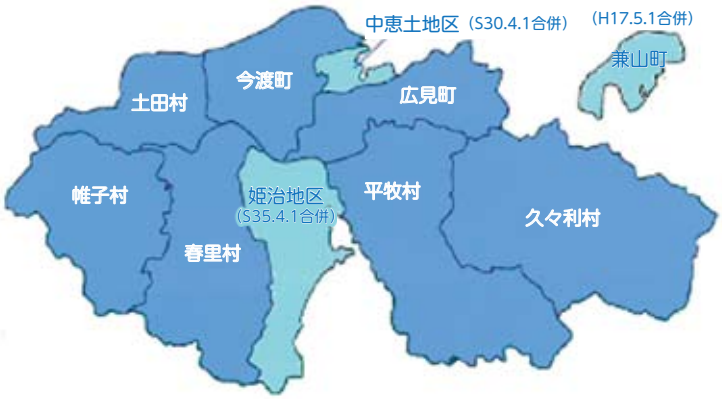
こうして、美しい木曽川の風景を見るために、多くの人が可児を訪れるようになりました。なかでも、木曽川を船に乗って下る「日本ライン下り」は観光客に人気がありました。

土田の日本ライン下り渡船場付近は、現在は公園となっており、散策しながら季節の草花や木曽川の風景を楽しむことができます。

日本ライン下りの乗船場（昭和45年）

16 人口増加率が日本一に！　可児市の誕生

歴史じまん



合併前の可児

可児市の市章

可児市の「可」の字を近代的なセンスで図に表しています。融和と、かぎりない可能性を表しています。

すごい point

・可児市になるまえの可児町は、７つの町村が合併して誕生したんだ。
・可児市が誕生したころは、人口増加率が日本で１番高かったんだ。

◎可児町の誕生（昭和の大合併）

可児市が「市」になる前は、可児町という名前でした。

可児町は、昭和30年（1955）に広見町・今渡町・土田村・帷子村・春里村・平牧村・久々利村の７つの町村が合併して誕生しました。その後に、中恵土地区と姫治地区も可児市に編入されました。

昭和40年代になると、可児町には新しい住宅団地が次々とつくられ、人口が急増しました。日本の町の中で５番目に人口が多く、人口増加率は日本で１番でした（昭和55年国勢調査より）。

◎可児市の誕生

可児市は、昭和57年（1982）、岐阜県で14番目、全国で650番目の市として誕生しました。市制記念式典や祝賀パレードが行われたほか、可児市音頭が発表されたり、記念品がつくられるなど、多くの人が可児市の誕生をお祝いしました。

また、同時に国鉄（今のＪＲ）広見駅が可児駅に、名鉄広見駅が新可児駅に、名鉄伏見口駅が明智駅へと名前が変わりました。

市制記念イベントの様子

◎平成の大合併

平成17年（2005）には、平成の大合併により、可児市は可児郡兼山町と合併しました。この合併により、可児市の面積は87.57㎢となり、人口は10万人をこえました。